



# スタイル・ライフ

池澤夏樹著

中央公論社

中公文庫 ©1991

スタイル・ライフ

一九九二年一月二五日印刷  
一九九二年二月一〇日発行

著者 池澤夏樹

発行者 嶋中 鵬二

整版印刷 三晃印刷

カバー トープロ

用紙 本州製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

ISBN4-12-201859-5

Printed in Japan

中公文庫

スティル・ライフ

池澤夏樹著



中央公論社



目次

スタイル・ライフ

7

ヤー・チャイカ

91

解説

須賀敦子

205



ス  
テ  
ィ  
ル  
・  
ラ  
イ  
フ





ス  
テ  
ィ  
ル  
・  
ラ  
イ  
フ



この世界がきみのために存在すると思っではいけない。世界はきみを入れる容器ではない。

世界ときみは、二本の木が並んで立つように、どちらも寄りかかることなく、それぞれまっすぐに立っている。

きみは自分のそばに世界という立派な木があることを知っている。それを喜んでいゝ。世界の方はあまりきみのことを考えていないかもしれない。

でも、外に立つ世界とは別に、きみの中にも、一つの世界がある。きみは自分の内部の広大な薄明の世界を想像してみることができる。きみの意識は二つ

の世界の境界の上にいる。

大事なのは、山脈や、人や、染色工場や、セミ時雨などからなる外の世界と、きみの中にある広い世界との間に連絡をつけること、一步の距離をおいて並び立つ二つの世界の呼応と調和をはかることだ。

たとえば、星を見るとかして。

二つの世界の呼応と調和がうまくいっていると、毎日を過すのはずっと楽になる。心の力をよけいなことに使う必要がなくなる。

水の味がわかり、人を怒らせることが少なくなる。

星を正しく見るのはむずかしいが、上手になればそれだけの効果があがるだろう。

星ではなく、せせらぎや、セミ時雨でもいいのだけれども。

\*

星の話だ。

ぼくたちはバーの高い椅子に坐っていた。それぞれの前にはウィスキーと水のグラスがあった。

彼は手に持った水のグラスの中をじっと見ていた。水の中の何かを見ていたのではなく、グラスの向うを透かして見ていたのでもない。透明な水そのものを見ていたようだった。

「何を見ている？」とぼくは聞いた。

「ひょっとしてチェレンコフ光が見えないかと思って」

「何？」

「チェレンコフ光。宇宙から降ってくる微粒子がこの水の原子核とうまく衝突すると、光が出る。それが見えないかと思って」

「見えることがあるのかい？」

「水の量が少ないからね。たぶん一万年に一度くらいの確率。それに、この店の中は明るすぎる。光っても見えないだろう」

「それを待っているの？」

「このグラスの中にはその微粒子が毎秒一兆くらい降ってきているんだけど、原子核は小さいから、なかなかヒットが出ない」

彼の口調では真剣なのか冗談かわからなかった。

「水の量が千トンとか百万トンといった単位で、しかも周囲が真の暗闇だと、時々チラッと光るのが見えるはずなんだが、ここではやっぱり無理かな」

考えてみると、この話をした時には、ぼくと彼はまださほど親しいわけではなかった。アルバイト先で知り合って、時おり飲んで、とりとめもない話をするだけだった。どこに住んでいるのかも知らない。いつも半ばは独言のような彼の話をぼんやり聞いていた。

「微粒子ね」

「ずっと遠くで星が爆発するだろう。そうすると、そこから小さな、ほとんど重さもない粒子が大量に宇宙全体に飛び出す。何千年も飛行して、いくつかが地球に落ちてくる。いくつかって言うのが、このグラスに毎秒一兆くらい」

「星か」

「そう、なるべく遠くのことを考える。星が一番遠い」

「遠くのことね」とぼくはまた繰り返した。

自分の頭蓋の内側が真暗な空間として見え、頭上から降ってきてそこを抜けてゆく無数の微粒子がチラチラと光を放って、それをぼくは単なる空虚でしかないはずのぼくの脳髄で知覚し、そのうちにぼくというものは世界そのものの大きさにまで拡大され、希釈され、ぼくは広大になった自分をはるか高いところから見下ろしている自分に気付いた。その静けさの彼方で、一人の男が一個のグラスを手にして、中の水をじっと見つめていた。

彼、佐々井と最初に飲んだのは、ぼくがアルバイト先の染色工場で大ポカをやった日の夜だった。工場の主任にがんが怒鳴られて小さくなっていたぼくを見兼ねて横から口を出し、責任の二割ばかりを背負ってくれたのが佐々井だった。その夜、ぼくはお礼のつもりもあって、彼を飲みに誘った。

その頃、ぼくが働いていた職場の工程は三段階に分かれていた。

第一段階は床に大きな染色槽がいくつも並んだ広い部屋で、常にかすかな酸の匂いが立ち込めている。そこで働くのはぼくらのようなアルバイトではなく、

常雇いの工員たちだ。

生成りの糸の総かせを何十もフレームに掛けて、槽の中に降ろし、染色と定着をする。色の指定はデザイン室が出す作業伝票に符号で書いてあった。たとえば、わずかに紫が入った濃紺で、織った時に少し艶が出るような仕上げならば#2557、SSといった具合だ。糸を指定の色に仕上げるのは温度と時間が微妙に作用するむずかしい工程で、相当の経験を要するようだった。

染色の広い部屋の隅には壁を白く塗った小さな比色室があった。そこには特別の照明装置と標準色見本のケースがおいてあって、いつも同じ条件のもとで色の比較ができるようになっていたけれども、実際にそこが使われることは稀だった。時にはデザイン室から誰かがやってきて、染色に立ち会うこともあった。そういう熱心なデザイナーは職工たちに嫌われた。

染色と定着と水洗が終わった総を大きなステンレス製の脱水機にかけて、次の乾燥室の連中に渡すまでがぼくたちアルバイトの仕事だった。総は二十束くらいずつバスケットに入ってくる。一度に染色槽から上がる糸の量はバスケットにして十個分くらいあって、それが一ロットだ。どんな場合にも別のロット



の糸が脱水機の中で混ざったりしないようにと、そこで働く最初の日に何度も言われた。同じ#2557-SSの配合で染めても、実際の仕上がりは一回ごとに少しずつ違う。糸のままではわからないが、織りあげた時には歴然と境目ができる。

それはよく承知していたのだが、その日は忙しすぎた。いくつもの染色槽から次々に似たような色の糸が上がってきて、脱水室は混み合い、床に整理して置いたつもりのバスケットが、隅の方で紛れてしまった。床面が狭くて通りにくかったので、誰かが通りがかりにバスケットをゴム長で押したのかもしれない。ともかく一ロット分を脱水機に放り込んで、スイッチを入れ、次の分を整理している時に、糸が混ざってしまったことに気付いた。

忙しい時だから主任は気が立っていた。ぼくの真前に立って、五分くらい怒鳴りちらした。唾が飛んできた。わめいているうちにいよいよ腹が立ってきたようで、顔が赤くなり、腕を振りまわした。

「おまえのせいで、俺はまた事故伝票を書くんだ。いつでも嫌な役割は俺のところにもわってくるんだ。まったく、安い給料でよく働いてくれるよ。ありが